

# 文学・映像作品を用いた英語教育の可能性について

安田 優\*

Possibilities for English Education through Literary and Film Works

Masaru Yasuda\*

*Received December 10, 2013*

## Abstract

The traditional system for English education in Japan was not thought to be responsive to the needs of Japanese learners of English. Today's English education curriculum has come to focus more on communication skills. English proficiency tests such as TOEFL and TOEIC have accordingly become important for assessing the communicative English proficiency of English learners. During the course of "improving" the educational system, however, literature as an English teaching material at college has been dismissed as impractical, while movies as an English teaching material have become regarded as practical. In communication, what is more important than TOEFL/TOEIC scores is to have something worth talking about, something that will make others stop and listen. The underpinning of communication is respect for the cultural, social and historical background of others. The use of literature in language education, along with movies, is more relevant to the development of communication skills in the real sense of the term. This paper is intended as an investigation of the possibilities for English education through literary and film works.

## 1. 大学英語教育における実学重視傾向と文学教材・映画教材

英語教育における実学重視の傾向が見られるようになってから、かなりの年月が経過している。多くの場合「実学」とは、英語コミュニケーション能力の向上と英語運用能力試験での高得点取得を重視することを意味する。このような流れの一端は、文部科学省による2003年の『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』においても見ることができる。その中では現在と同様に、英語が使えるようになるためには「文法や語彙などについての知識を持っているというだけではなく、実際にコミュニケーションを目的として英語を運用する能力が必要である」<sup>1)</sup>と国際共通語としてのコミュニケーション能力の向上が謳われている。

またコミュニケーション能力を図る指標として TOEIC をはじめとする英語運用能力試験重視の流れも顕著である。大学英語教育の現場では、コミュニケーション能力向上と運用能力試験のスコア向上を目標とする教育が行われるようになってきた。その結果、多くの大学ではコミュニケーション能力を育成するべく英語だけで行う授業や TOEIC 対策に特化した

---

\*未来創造学部 Faculty of Future Learning

授業、あるいは授業の一部として TOEIC 対策を取り入れる授業が設置されるようになったのである。本来、TOEIC や TOEFL のような試験は学習者の進捗状況を図る指標とすべきものであり、そのスコア向上自体が目的とされるべきではない。運用能力試験での好成績と実用的なコミュニケーション能力は必ずしも一致しない。授業を通して学習者の総合的英語力が向上し、その副産物的成果としてスコア向上が伴うことを目指すべきなのである。実際、文学作品を活用した授業で英語力が向上することを実証する研究<sup>2)</sup>もある。

しかし、このような流れの中で英語教材選択の幅に制限が課されるようになった大学も多い。特に運用能力試験に関連する教材が好まれるようになったのである。国際社会で通用する高い英語コミュニケーション能力の育成という長年に渡って英語教育に「期待された成果」を達成できていないことに対して槍玉に挙げられ、批判の矛先を向けられることになったのは文学教材である。大学英語授業における文学作品は伝統的な訳読式授業と関連づけられやすく、一見したところ「会話力」とは無縁に見えるからであろう。文学は否定的イメージを纏うことになり、実践的英語力向上という旗印のもとでは文学作品を使用することは好ましくないと判断されるようになったのである。このことが現在の文学関連英語学習教材の過小評価につながっている。このように文学教材が不人気である一方、好意的な評価を得るようになったのは、映画や映像作品を活用した教材である。映画は音声を伴う媒体であり、そこでは文脈に沿った対話が映像として提示される。それゆえに実践的コミュニケーションと結びつけて考えられやすいのである。

映画はその媒体誕生当初から文学と深く関連し続けている。しかし、実用的な英語学習教材という視点からは、現在、対照的な捉えられ方をされているのである。本稿では英語教材としての文学作品の有用性を再検討し、文学作品と映像作品を活用した効果的な英語教育の可能性について考察する。

## 2. 英語授業における文学教材の再活用の動き

英語教育という文脈において文学が否定的なイメージを纏わされる中で、文学教材の有用性を評価する動きもある。英語教育において訳読式授業が重要な役割を担ってきたことは確かであり「訳読の利用価値はこれからも少なからず存在」<sup>3)</sup>していこう。しかし、新たな流れにおいては訳読だけに焦点があてられるわけではない。そこでは文学作品をコミュニケーション活動と直結させる方法が提案されているのである。文学教材それ自体は過去の遺物ではなく、英語学習教材としての価値を有し続けている。現代的なニーズに合うかどうかは、その活用次第なのである。

その有用性ゆえに文学教材を活用すべきであるという潮流を生む転機の一つとなったのが、大学英語教育学会(JACET)関西支部文学教育研究会<sup>4)</sup>の活動である。この研究会メンバーが行ったシンポジウムは「私の文学教材実践報告：文学の可能性を探って」<sup>5)</sup>と題され、そこでは英語教材としての文学作品の可能性が論じられた。文学作品は学習者の興味と想像力を喚起し、学習意欲はもちろんコミュニケーション能力を高める優れた英語教育上の効果を上げられることが、実践例と共に明示されたのである。

これまでも英語教育においては実用主義と教養主義の間の綱引きはあったが、現在は前者に過度の力点が置かれている。しかし、大学という高等教育機関に相応しい英語教育について検討する際、一つの手がかりとなるのは「英語教育を人間教育の立場から考える」<sup>6)</sup>という文学教育研究会の基本理念であろう。流暢な発話能力と英語能力運用試験成績の向上だけを到達目標とする授業は本末転倒である。価値のないことを流暢に話すことができるというだけでは実践的コミュニケーション能力があるとは言えない。それだけでは不十分なので

ある。

実践的なコミュニケーション能力向上を目指すのであれば、何をどのように話すかということが重要である。また、真の意味でのコミュニケーションは対話する相手の文化・社会・歴史的背景を理解し、敬意を払った上ではじめて成立する。実践的コミュニケーション能力を養う英語教育には人間教育という視点が欠かせないのである。大学における英語教育では、それまでに習得した英語力を基礎として、他者を配慮しながら自分の意見を発信する力を育成する必要がある。このような点を鑑みると、文化・社会・歴史的産物でもある文学作品は学習教材としてかけがえのない価値を持つことになる。

### 3. 英語授業における文学教材活用と問題点

英語授業においては学生の学習意欲をどのように高めるかが一つの鍵である。教員は学生に迎合する必要はないが、教材選択の際には学生の多くが関心を持ち、かつ教育目的に合う教材を選択することも重要である。しかし、文学関連の英語教材についてはその有用性に疑義が呈されてきたことが不人気だというイメージにつながった。その結果、全大学英语教材に占める文学教材の割合も低下し、選択の幅は狭まっている。文学教材が使いづらいと考えられやすいこともまた、この傾向に拍車をかけている。このような事情もあり、英語教員の間でも「学生も文学が好きではないのでは」という思い込みが広まっている可能性もあるのではないだろうか。

文学教材が避けられやすいという状況が学生のニーズを反映するものであるならば、あえて学習意欲を削ぎかねない教材を選択する必然性はない。しかし、学生が英語教材としての文学を少なくとも嫌いではない、あるいは好ましく思っているのであれば、また文学教材が実践的英語力を向上させるのに貢献するのであれば、英語授業の中で文学作品を活用することに何の問題もないはずである。ここでは英語授業における文学作品の活用に関する学生アンケート調査結果を考察する。

#### 3-1. 学生アンケート調査方法と調査対象

表 1 調査対象大学の入試難易度<sup>7)</sup>

	2005 年入試難易度	2014 年入試難易度(参考)
大学A (私立)	60～63	62～65
大学B (私立)	56～53	55
大学C (私立)	53	54～55
大学D (私立)	44～53	46～48
大学E (国立)	59～62	57～58

本アンケート調査は、5つの大学において各大学が提供する語学の授業時間内に記入用紙を配布・回収する形式で実施した。記名のアンケートである。本調査が対象としたのは私立大学4校と国立大学1校である。これらの大学の入試難易度は表1に示している通りである。

調査当時の入試難易度は40後半から60半ばであるが、各大学の現在の入試難易度ランキン

グもほぼ同水準で推移している。また、本調査が対象とした学生の所属学部は、文学部・外国語学部・法学部・未来創造学部・経済学部・商学部・工学部・医学部・薬学部となっており、理系と文系を網羅している。総回答者数は 472 名であり、その内訳は日本人学生が 434 名、非英語圏からの留学生が 38 名である。

### 3-2. 学生アンケート項目

アンケート項目の中で、全学生を対象にしたものは 8 項目である。具体的な共通質問項目は表 2 に記載した通りである。

表 2 アンケート質問項目(共通)

質問①	中学校の英語のクラスで英米文学の作品を読んだことがありますか。読んだことがある場合は何を読んだか書いてください。
質問②	高校の英語のクラスで英米文学の作品を読んだことがありますか。読んだことがある場合は何を読んだか書いてください。
質問③	大学の英語のクラスで英米文学の作品を読んだことがありますか。読んだことがある場合は何を読んだか書いてください。
質問④	英語の授業で文学作品を扱って欲しいと思いますか。思う場合も思わない場合も、その理由を書いてください。
質問⑤	英語のクラスで文学作品を読むとしたら、長編を一つ読むのと、短編をいくつも読むのとどちらがいいですか。また、それはなぜですか。
質問⑥	英語のクラスで文学作品を読むとしたら、その作品だけを扱って欲しいですか。それともその作品が映画化されている場合は、映画も活用しながら読みたいと思いますか。また、なぜそのように考えますか。
質問⑦	英語のクラスで文学作品を用いて英語を学ぶ場合、文化的・社会的な背景も知りたいと思いますか。また、なぜそのように考えますか。
質問⑧	文学作品は新聞記事などの英文と比べて、難しいと思いますか。またそれはなぜですか。

### 3-3. 学生アンケート調査結果（大学別）

このアンケート項目の中で、英語授業における文学教材活用の可否を問いかけたものは質問④である。大学の英語授業において文学教材が回避される傾向や、昨今の学生の書籍離れの傾向、そして一般に流布する文学教材の否定的イメージなどを鑑み、集計前に予測したのは次の三点である。

- ・文学作品に取り組みたい学生はほとんどいないのではないかな。
- ・入試難易度が下がるにつれて学生の文学に対する関心は低下するのではないかな。
- ・文系の学生よりも、理系の学生の方が文学に対する関心度は低いのではないかな。

つまり学生も文学教材活用には否定的なのではないかという推測である。実際、本調査時点で英語授業において文学作品に触れた経験のある学生の割合は非常に低い。表2の質問①、質問②の項目に関して、中学校や高校において英語授業内で文学作品に接する機会があったと回答した日本人学生は17%に過ぎない。また、表2の質問③に関して、文学作品を扱う英語授業を受講したことがあると答えた日本人学生は14.2%に留まっている。この数値には英米文学に関する講義を受講した場合は含まれていない。つまり、回答者の大半は英語授業で文学作品に触れた経験がないのである。

また、表2の質問⑧では文学作品を読んだことがある場合、新聞記事などの英文と比較して、文学で使われる英語の難易度を問いかけている。読んだ経験があると答えた学生の80%以上は難しいと答えている。難しさの理由として挙げられているのは「抽象的な表現」、「比喩表現」、「表現の多様性」、「心情表現」、「方言」、「非文法性」などである。しかし、質問⑧において文学で用いられる英語が難しいと答えている学生の大半は、文学作品を活用して欲しいと回答している。難しいと考えながらも学生は、彼らが難しいと考えている事柄を学ぶ必要性・有用性を認識しているのである。

ここでは特に表2の質問④、質問⑤、質問⑥、質問⑦を主要項目として回答集計結果を大学別に検討する。

### 3-3-1. 学生アンケート調査結果（大学A）

大学Aは文系学部・理系学部を擁する総合大学である。総回答者127名中、語学授業で文学教材を使って欲しいと考える学生は91名であった。相当数の学生が英語教材としての文学作品を好意的に捉えていることがわかる。大学Aで実施したアンケートの主要項目の回答結果をまとめたものが表4である。

表4 大学Aにおける主要項目回答

項目	回答者数	全体に占める割合
①文学を語学クラスで使って欲しい	91名	71.6%
②文学を語学クラスで使って欲しくない	35名	27.5%
③どちらでも・無回答	1名	0.7%
④文化・社会的背景も学びたい	103名	81.1%
⑤映画も用いて学びたい	123名	96.8%
⑥短編を使って欲しい	103名	81.1%
⑦長編を使って欲しい	20名	15.7%
⑧短編・長編の両方を使って欲しい	4名	3%

回答者のうち、理系の学生は21名である。その中で文学作品の活用に肯定的な学生は12名、否定的な学生は9名であった。過半数を超える57%の理系学生は、文学作品の使用に抵抗感がないのである。71.6%の学生が文学作品を活用して欲しい理由として挙げた理由のうち代表的なものは次の通りである。

- ・色々な種類の文章や文体に慣れておいた方がいい。
- ・文学は世界共通であり常識のようなもの。知っておくことは無駄にはならない。
- ・今まで文学に触れる機会がなく、自分から読むことはないのやってみたい。
- ・物語は読んでいて楽しい。
- ・普通の長文よりも印象に残ると思うから。
- ・翻訳だけでなく原文で読んでみたい。
- ・本物の英語で書かれているものを読みたい。
- ・アメリカやイギリスに行った時にその国の文化を知っておくとなじめそうなので。
- ・英語だけをやるのなら高校までとあまり変わらない。大学生としての教養も身につけたい。

他方、文学作品の活用に否定的な学生が挙げた理由は「文学に興味がないから」、あるいは「文学は難しいから」という二点に集約される。彼らの多くは過去に文学作品に接する機会がなかったと回答しており、日本文学も含めた文学に元々関心がないと思われる。また、文学は役に立たない、あるいは文学は難しいというイメージを持つがゆえに否定的であるのかもしれない。

文学作品だけでなく、文化や社会的背景もあわせて学びたいかどうかについては、81.1%の学生が学びたいと回答している。

- ・文学作品は社会や文化の影響を受けており、社会的・文化的背景を知ることで作品をより深く理解できる。
- ・他国の文化や社会を知らないと、独善的になり他者を受け入れられなくなりそう。
- ・色々な文化や社会の理解は他分野においても必ずプラスになる。
- ・英語を使ってコミュニケーションを取る時、その相手がどんな文化・社会で生きてきたのかを知りたい。
- ・英語だけを扱う授業なら高校時代と変わらない。

これらの回答では、特に文学作品と社会・文化の関連を指摘する学生が多い。コミュニケーションの前提として、他文化・社会について知っておくことが必要だと認識している学生が多く見られることも特筆すべきである。

映画と文学作品の併用については96.8%の学生が肯定的である。多くの学生は、視覚・聴覚面も活用して文学作品の理解を深めたいと考えているのである。

- ・作品のイメージをつかみやすく、映像もあれば学んだことを覚えやすい。
- ・読んだ時の想像と映像を見比べることで、足りなかった部分を補える。
- ・映画を見ることで、物語を理解しやすくなる。
- ・抽象的な表現がどのように視覚化されているかに興味がある。
- ・バランス良く英語力がつく。
- ・勉強の動機づけになる。

映画の使用に否定的な学生はわずかであるが「映画が好きではない」という意見だけではなく、「文学作品の特徴に慣れるという観点から映画を使わない方がいい」という文学作品の単独での使用を肯定する意見もあった。

短編小説と長編小説の活用では、前者を好む学生が大半である。長編を好む学生の意見は「長編を読むことで達成感を味わえる」、また「文章全体に目を向けて読む練習になる」とい

う建設的なものばかりであった。他方、短編を選択した学生の中には「長編だと興味がない内容だった場合につらい」、「長編の方が難しく途中で挫折しそう」と消去法で短編を選択する学生もいた。しかし、大半は「限られた時間内で多くの作品に触れる方が面白い」、「様々な作家の文体や作風に接する方が役に立つ」という建設的な回答であった。

### 3-3-2. 学生アンケート調査結果（大学B）

大学Bでは英語以外のヨーロッパ系言語を専攻する学生を調査対象としている。調査は彼らを対象とする英語の授業内で実施した。表5はその主要質問項目回答を集計したものである。総回答者数は18名であるが、その中で文学教材を授業で使って欲しいと答えた学生は94.4%にも達する。

表5 大学Bにおける主要項目回答

項目	回答者数	全体に占める割合
①文学を語学クラスで使って欲しい	17名	94.4%
②文学を語学クラスで使って欲しくない	1名	5.5%
③どちらでも・無回答	0名	0%
④文化・社会的背景も学びたい	18名	100%
⑤映画も用いて学びたい	17名	94.4%
⑥短編を使って欲しい	16名	88.8%
⑦長編を使って欲しい	0名	0%
⑧短編・長編の両方を使って欲しい	1名	5.5%

大学Bの学生は、英語に加えてもう一つ別の言語を習得したいと考えており、語学に関しては学習意欲が高い学生であると推察できる。彼らは文学教材を使用して欲しい理由として、次の項目を挙げている。

- ・今までに文学作品を英語で読んだことがないので興味がある。
- ・できるだけ文学に触れてみたい。
- ・文学作品を扱ってその国の背景を勉強したい。
- ・文学を取り入れることで、英米のことをより深く知ることができる。
- ・英米圏の人たちの考え方を知ることができる。
- ・北欧で受講した文学を使う英語授業で、発音やリスニング力、リーディング力が伸びた経験がある。ただし授業でどのように扱うかが重要である。

ここで注目すべきは英語圏以外の国での学習経験に触れている回答である。小説を使っていたが訳読ではなく、授業内では討論も含め四技能を用いた活気ある授業展開がなされていたとのことである。韓国などの非英語圏においても英語能力運用試験での高得点取得やコミュニケーションな能力育成を重視し、英語教材としての文学の活用頻度は低いように見受けられる。しかし、言語運用能力向上という目標を設定し、文学を効果的に用いることで総合的な英語力は高まる。学生も指摘するように、文学作品自体は英語力向上に有効であるが、そ

の活用法も重要なのである。また、否定的意見の中には「社会に出た時に直接役立つものを教えて欲しい」という一般的な文学の否定的イメージを体現するものも含まれていた。

大学 B においては、文学教材を用いる際に文化・社会的背景についても学びたいと回答した学生は実に 100%である。学生はコミュニケーションの際の異文化理解の重要性を認識しており、それゆえに文化や社会と不可分の関係にある文学作品の活用に肯定的な意見を示したとも言えるだろう。具体的な理由として挙げられていたものは次の通りである。

- ・理解を深め、作品を楽しむため。
- ・文化と社会は密接に関係していると思うから必要。
- ・文化的な背景などを知ることはその国を知るのに良いことだと思う。
- ・文化を知ることによって作品の深い意味や作者の言いたいことを理解できることもある。
- ・背景を知り、色々なことを身につけたい。
- ・文化や社会的背景は当然、知っておくべきことである。

文学作品と映画との併用については 94.4%が肯定的である。「映画に興味がある」からという意見を除く代表的な回答は二つに大別できる。一つは「映像がある方が作品にのめり込める、理解しやすい」、「より楽しみながら学べる」という文学の理解度を高める手助けとしての役割を映画に期待するものである。もう一つは「どのように文字が映像で構成されているかを知りたい」、「文字とは違う感じを味わえる」というように、映画を文学との比較に用いたいというものであった。

短編と長編との選択では、両方使って欲しいという回答と短編を使って欲しいという回答をあわせると 100%である。「たくさん読める方が楽しい」、「集中力が途切れない」という理由を挙げている学生が大半であった。文学作品を英語授業で活用して欲しい学生の比率が高い大学 B でも短編を選択する学生がほとんどであるということは、教材選択の際に考慮すべき事柄であるかもしれない。

### 3-3-3. 学生アンケート調査結果（大学 C）

大学 C では、文系学部に属する英語の教職課程履修生を調査対象とした。総回答者数は 28 名であり、表 6 はその回答結果をまとめたものである。

表 6 大学 C における主要項目回答

項目	回答者数	全体に占める割合
①文学を語学クラスで使って欲しい	26 名	92.8%
②文学を語学クラスで使って欲しくない	2 名	7.1%
③どちらでも・無回答	0 名	0%
④文化・社会的背景も学びたい	26 名	92.8%
⑤映画も用いて学びたい	27 名	96.4%
⑥短編を使って欲しい	19 名	67.8%
⑦長編を使って欲しい	5 名	17.8%
⑧短編・長編の両方を使って欲しい	1 名	3.5%



調査対象の学生は、法学や経済を専攻としながら英語教員免許の取得を目指している。それだけに彼らの英語学習意欲は非常に高いと言える。言語を専攻する大学 B の数値と同様、大学 C においても文学を英語授業に取り入れて欲しい学生は 90%を超えている。学生からの具体的な意見としては次のようなものがある。

- ・文学は面白いので、それを使うことで英語の力が伸び、授業が楽しくなる。
- ・英語を読んで楽しいと感じ、英語への興味を持った上で TOEIC につなげたい。
- ・会話部分から、ためになる表現を多く学べる。
- ・感情によって変わる言い回しは役に立つ。
- ・普段、文学作品を読む機会がないので読みたい。
- ・会話部分も含まれているので、ネイティブ特有の英語が身につくと思う。
- ・作品を通して文化を感じ取ることができる
- ・文法や読解だけの授業ではなく、作品を読むことで授業を楽しめる人が増える。
- ・楽しみながら文法や語彙などを学ぶことができる。
- ・歴史的背景も自然に学ぶことができ、文化の違いを考える大きな手助けにもなる。
- ・視野が広くなり、より多くの教養や知識を学ぶことができる。

他大学と比較すると、文学作品の面白さと楽しさを英語学習に結びつけようとする回答が多い。英語教員としての視点も持って、質問項目に回答していると思われる。言語をそれだけ取り出して学習するというのではなく、文化的・社会的な構築物でもある文学を通してオーセンティックな英語を学んでいこうという姿勢も読み取れるのではないかな。

また文化的・社会的なこともあわせて学びたいかどうかについては、92.8%の学生が肯定的である。文学作品を理解するのに有用であるからという回答が大半である。数名の学生は文化・社会的な文脈を学ぶことと英語の学習効果についても言及している。

- ・文化的・社会的な背景を知るとはその作品の深い理解につながる。
- ・どのような価値観が背景にあるかを知りたい。
- ・文学作品を通して、歴史や時代背景など頭に残りにくい知識を蓄えられる。
- ・作品が書かれた時代と文体との関係について考えてみたい。
- ・文化的・社会的背景を知ること、英文が頭に入りやすくなり学習効果が高まる。

文学と映画との併用については 96.4%が肯定的に捉えている。主な理由は以下の通りであるが、やはり文学作品を理解する手助けとして用いたいという意見や、文学と映画の表現を比べてみたいという意見が多い。また、読解・聴解のどちらにも取り組みたいというものや、学習内容の定着に言及する意見もあった。

- ・自分の作品理解と映画の解釈の違いを比べると面白い。
- ・場面や背景を想像しやすくなるので、部分的に読んで理解した後で映画の該当場面を見るとき作業を繰り返して読むと楽しいと思う。
- ・読んだだけでは理解できなかったり、想像できなかったりする部分を補える。
- ・読む作業と聴く作業の両方をやりたい。
- ・映画も見ること、学んだことが記憶に残りやすくなる。

長編と短編では、短編を選択する学生が 67.8%と過半数を占める。短編を好む学生が挙げた代表的な理由は次の通りである。

- ・数多くの文学作品を知り、色々な英語に触れたい。
- ・話の結末を早く知りたい。
- ・各短編を読み終えるごとに達成感を味わうことができる。
- ・短編の方が集中力を維持できる。
- ・様々な種類の短編を扱う方が、色々な学生の好みに合わせられる。
- ・文学の表現は文法通りとは限らないので、多くの作品に触れて色々なパターンの表現を知っておきたい。
- ・長編を読んで途中でわからなくなるとモチベーションが下がる。

長編を好む学生の回答としては「授業ごとに話が進んでいくのを楽しみたい」との回答が1名、その他の学生は「長編を読み切ることで自信につながる」との回答であった。

### 3-3-4. 学生アンケート調査結果（大学D）

表7は文系学部と理系学部を擁する大学D全体の調査結果をまとめたものである。総回答者数は221名である。理系学部回答者数は130名、文系学部回答者数は91名であり、そのうちの38名は非英語圏からの留学生である。さらに表8、表9、表10では、それぞれ理系学部日本人学生、文系学部日本人学生、文系学部留学生を分けて提示している。

表7 大学Dにおける主要項目回答(全体)

項目	回答者数	全体に占める割合
①文学を語学クラスで使って欲しい	132名	59.7%
②文学を語学クラスで使って欲しくない	52名	23.5%
③どちらでも・無回答	37名	16.7%
④文化・社会的背景も学びたい	127名	57.4%
⑤映画も用いて学びたい	190名	85.9%
⑥短編を使って欲しい	167名	75.5%
⑦長編を使って欲しい	30名	13.5%
⑧短編・長編の両方を使って欲しい	6名	2.7%

表8 大学Dにおける主要項目回答(理系学部日本人学生)

項目	回答者数	全体に占める割合
①文学を語学クラスで使って欲しい	83名	63.8%
②文学を語学クラスで使って欲しくない	30名	23%
③どちらでも・無回答	17名	13%
④文化・社会的背景も学びたい	66名	50%
⑤映画も用いて学びたい	118名	90.7%
⑥短編を使って欲しい	108名	83%
⑦長編を使って欲しい	18名	13.8%
⑧短編・長編の両方を使って欲しい	3名	2.7%

表 9 大学 D における主要項目回答(文系学部日本人学生)

項目	回答者数	全体に占める割合
①文学を語学クラスで使って欲しい	22 名	41.5%
②文学を語学クラスで使って欲しくない	15 名	28.3%
③どちらでも・無回答	16 名	30.1%
④文化・社会的背景も学びたい	35 名	66%
⑤映画も用いて学びたい	45 名	84.9%
⑥短編を使って欲しい	40 名	75.4%
⑦長編を使って欲しい	7 名	13.2%
⑧短編・長編の両方を使って欲しい	2 名	3.7%

まず、大学 D 全体の集計結果を見ると、英語授業における文学作品の活用について肯定的な意見を持つ学生の比率は 59.7%と過半数は超えている。この数値は低めではあるが、たとえば大学 A における集計結果とそれほどの大差はないように思える。しかし、大学 D に関しては、回答を学部別に検討することで、学部間での差が明らかになる。

大学 D において、文学作品の活用に肯定的な学生が文学教材を扱って欲しい理由については、理系・文系学生の間である程度共通しており大きな違いはない。

- ・自力では読めない／読む機会が少ないので、授業で読んでみたい。
- ・英米圏の文学を読んでみるのは面白そう／楽しそうである。
- ・日本文学との表現方法／内容の違いを比べてみたい。
- ・教科書で英語を学ぶより小説で英語を学ぶ方が力がつきそう。
- ・英語により親しみが持てるようになる。
- ・英語表現を自分ならどのように日本語に翻訳するかを考えることは楽しい。
- ・文学的な表現も学んでみたい。
- ・他の国の文化を理解したい。
- ・教科書の問題を解くだけだとつまらないので、自分の知識を応用しながら文学作品を読んでみたい。
- ・他国の文学を知ることは視野を広げる／教養を高める貴重な体験である。
- ・教科書にない実用的な表現が学べる。
- ・教科書の文章が読めても、文学作品などが読めなければ意味がない。

また文学作品の活用に否定的な学生の理由も理系・文系日本人学生の間には大きな差はない。代表的な回答は「今の英語力では文学作品は難しい」、「文学には興味がない」というものであった。少数意見ではあるが「会話力向上に結びつかない」、「TOEIC に対応したことをやって欲しい」という文学の実用性を否定する回答や、「簡単な英語で精一杯」、「英語そのものに関心がない」という回答も見受けられた。

大学 D の調査結果の特徴は、理系学部と文系学部を分けて考えた場合、文学教材の活用に肯定的な文系学部日本人学生の割合がかなり少ないことである。英語授業で文学を活用することについて好意的な理系学生は 63.8%に達し、文系学部を主な調査対象とした大学 A の結果とも大差ない数値である。それに対し、文系学部の学生で文学作品使用に肯定的な学生は 41.5%に留まり、本調査において唯一、過半数を下回る結果を示している。

文化的・社会的な背景もあわせて学びたいかどうかについては、理系学生は 50%、文系学

生も 66%に留まる。他大学と比較して、この項目に肯定的な回答をした学生の比率は低い、彼らが挙げた理由自体はある程度まで共通している。

- ・知らない文化を知ることが大切であるし、知っておいて損はない。
- ・文化的・社会的背景を知ること、作品にもっと興味を持つことができる。
- ・文化的・社会的背景と関連づけて、作品を捉えることで理解が深まる。
- ・社会的背景を知らないと、それらが反映されている作品を理解できない。
- ・教養も身につけることができる。
- ・自分の英語表現に深みが増す。
- ・表面的なことだけでなく、深いところまで勉強できる。
- ・英語を学ぶことは、文化を学ぶことでもある。

文学を活用する際に映画も併用して学びたいかどうかについては、理系学生の 90.7%、そして文系日本人学生の 84.9%が肯定的である。理系・文系を問わず「映画も使うことで理解しやすくなる／面白くなる／興味が増す／楽しくなる／印象に残る」という回答が大半である。また「作品の内容理解度を映画で確認し、自分の理解が合っていたら学習意欲が高まる」、「本を読んだ上で映画を見て、字幕に頼らずに映画を理解してみたい」、「視覚的にも文化を学びたい」という回答も理系・文系に共通して散見された。

短編・長編に関する質問では、理系学生 83%、文系日本人学生 75.4%が短編作品を選択している。短編を選ぶ理由も理系と文系でほぼ共通している。

- ・短編を多く読む方が、様々なジャンルの作品／物語を読めて、変化があり面白い。
- ・色々な作家が使う表現／文体を学ぶことができる。
- ・短編の方が取り組みやすい気がするので、まずは短編から読んで慣れてみたい。
- ・長編だと読み慣れていないので、途中で飽きたり、話の流れや内容を忘れてたりして挫折しそう。短編なら気持ちの切り替えができる。
- ・短編をたくさん読む方が、色々な知識を得られる。
- ・早く結末を知りたい。
- ・長編よりもしっかりと取り組めて力がつきそうな気がする。

長編を選んだ学生が挙げた理由としては、「どうせやるのなら長くて内容の濃いものに取り組みたい」、「読み終えられた時に頑張ったという気になる／達成感がある」、「長編の方が物語にのめり込めて、学んだことを忘れづらい」、「登場人物の性格などを考え、推測しながら読むことができる」などがある。長編を選択する学生は比率としては低い、回答内容から判断すると、学習意欲が高い学生であると推察できる。

表 10 は大学 D の文系学部非英語圏からの留学生による回答集計結果である。ほとんどは中国からの留学生であるが、その結果は他大学の傾向と大差はない。文学教材の使用に否定的な学生は 18.4%であり「文学に関心がない」という意見がほとんどである。他方、文学作品の活用に肯定的な学生は 71%であった。日本人学生の回答と同様、文学作品の楽しさに言及するものや、文学を通じて教養や英語表現力を高めたり、他文化の人たちの考え方を学んだりできるという理由を挙げている学生が多い。

- ・英語力をアップすると共に自分自身の教養も高められる。
- ・英語力に加えて、知識を広げることができる。
- ・英語力を伸ばすのに向いている。

- ・外国の文化／英米の文化／欧米人の考え方をあわせて学ぶことができる。
- ・一般的な英語教材よりも面白い。
- ・文学作品で英語がどのように使われているかを知りたい。
- ・ちゃんとした考えや感情を伝えられる表現を勉強できる。

表 10 大学 D における主要項目回答(文系学部非英語圏からの留学生)

項目	回答者数	全体に占める割合
①文学を語学クラスで使って欲しい	27 名	71%
②文学を語学クラスで使って欲しくない	7 名	18.4%
③どちらでも・無回答	4 名	10.5%
④文化・社会的背景も学びたい	26 名	68.4%
⑤映画も用いて学びたい	27 名	71%
⑥短編を使って欲しい	19 名	50%
⑦長編を使って欲しい	5 名	13.1%
⑧短編・長編の両方を使って欲しい	1 名	2.6%

また、文化・社会的背景についてあわせて学びたいかどうかについては、肯定的な回答は次の意見に集約されるが、他大学を含めての日本人回答と共通していると言える。

- ・文化・社会的背景を学ぶことが英語学習にも役に立つ。
- ・作品の内容理解を深め、知識も得られる。
- ・言葉も文化であり、文化や社会的背景を学ぶことは必要である。
- ・文化的背景がわからなければ作品を理解できない。
- ・それらを知ることで英語をより自然に運用できる。

文学作品だけでなく映画も活用することについては、否定的な回答では「映画に興味がない」というものが大多数であるが、「作品を読んで想像した物語世界を大事にしたい」という建設的な回答もある。映画の活用に関する肯定的な回答は「映画が好きだから」という意見以外には次のような理由が挙げられているが、日本人学生との違いは見られない。

- ・文字で表現されているものが映画化されるとどうなるか、その違いを確認したい。
- ・文字で学んだことが、映像を見ることでより印象に残る。
- ・文学作品の理解が容易になる。
- ・楽しみながら自然に英語が身につけられる。
- ・言葉の勉強には、視覚や聴覚などの刺激がある方がいい／リスニング練習になる。

短編と長編の選択では無回答も多く、短編を好んだ学生の割合は 50%に留まる。長編との比較においては、短編の手軽さに言及する回答が多かった。

- ・短時間で色々な情報を入手できる。
- ・色々なジャンルの作品を読みたい。
- ・早く読み終えたいので短編がいい。

- ・短い文章の方が読みやすい。
- ・長文を読むのは難しく疲れる。短編なら飽きない。
- ・まずは短編で文学作品に慣れたい。

長編を選んだ学生の回答は「長編は一貫した物語なので理解しやすい」、「毎日少しずつ読み進めると力がつく」というものであった。

いずれの項目に関しても回答理由として挙げられているものは、表現の仕方こそ多少異なっているかもしれないが、日本人学生と留学生間で大きな違いはないと言える。

### 3-3-5. 学生アンケート調査結果（大学E）

表 11 は文系学部と理系学部学生を調査対象とした大学 E における調査の集計結果を示している。総回答者数は 78 名である。

表 11 大学 E における主要項目回答

項目	回答者数	全体に占める割合
①文学を語学クラスで使って欲しい	53 名	67.9%
②文学を語学クラスで使って欲しくない	16 名	20.5%
③どちらでも・無回答	9 名	11.5%
④文化・社会的背景も学びたい	60 名	76.9%
⑤映画も用いて学びたい	69 名	88.4%
⑥短編を使って欲しい	63 名	80.7%
⑦長編を使って欲しい	14 名	17.9%
⑧短編・長編の両方を使って欲しい	1 名	1.2%

大学 E の結果は、理系学部の学生と文系学部の学生を調査対象とした大学 A の結果に近い数値を示す。英語授業における文学作品の活用には好意的な学生の意見としては「楽しいから」、「面白いから」というもの以外には次のような回答があった。

- ・英語のクラスでやらなかったら一生触れる機会がないのでやりたい。
- ・自然な表現に加えて、日常会話で使わないような独特の表現が学べる。
- ・慣用句を覚えたりするのに効果的である。
- ・自分の教養としてもよい。
- ・話の筋を知っているような作品を、原語で読んでこの表現はこのようにいうのかと納得できる。
- ・一人で読むのは大変なので読みたい。
- ・物語になっていると英語が頭に入りやすい。
- ・英米の人たちの考え方がわかる。
- ・訳す力がつくと思う。
- ・楽しいので英語を読むスピードが上がる。
- ・文学作品を英語で読むことで、語感を身につけられる。

文学作品の活用に否定的な回答としては「文学作品は推測しながら読むのが難しく、読み進めるのに苦労する」など文学作品の難しさに言及するもの、「TOEIC 対策の方がいい」と運用能力試験スコアの向上に直結する授業を望むもの、そして「文学を使った英語のクラスを履修したことがあるが訳だけでつまらなかった」というものなどがあつた。文学を使う授業の退屈さに言及している学生の不満は、教材としての文学を否定しているのではなく、文学の活用法に関する不満であることに注目すべきであろう。

文学作品と文化・社会的背景をあわせて学ぶことについては、76.9%の学生が肯定的である。文学作品と文化・社会的背景との関連に言及する回答や、英語学習の際には文化的・社会的事象を学ぶことが重要であると認識している回答が多く見られた。

- ・文化や社会を知らないと文学作品をちゃんと読めない。
- ・日本人の考えだけだとわからないことも多いが、背景を知ることによって作品内容を理解しやすくなる／想像しやすくなる
- ・文化・社会的背景は登場人物の性格や行動と関わっている場合が多い。
- ・その国で当たり前と思われていること／異なる文化圏の考え方を知らなければ、作品を理解するのが難しい。文字面をなぞるだけになってしまう。
- ・英語と文化・社会はつながっており、知らないと文学作品をちゃんと読めない。
- ・文化・社会的背景を知ることによって言い回しや表現をより理解でき、興味を持って英語を学べる。
- ・どのように文化・社会的背景が作品に反映されているかを知りたい。
- ・昔、マンスフィールドの短編を読んだときに、文化的な要素がたくさん出てきた。
- ・より幅広い知識を身につけることができる。
- ・薄っぺらな理解では意味がない。日本の古文を読むときも背景を知った方が理解しやすかった。
- ・その方がより印象に残る。
- ・留学時の役に立つ。

文学作品と映画の併用に関しては 88.4%の学生が肯定的である。「映画が好きだから／楽しいから」という以外には次のような意見があつた。そのほとんどは他大学において挙げられている回答と共通している。

- ・映画を活用することでイメージがわかりやすい。
- ・映画を使うことで、文学に親しみを持てるようになる。
- ・視覚情報があると文字だけで理解できないことやイメージできないことを推測しやすくなる。
- ・物語の流れ／ストーリーをつかみやすくなり、理解が深まる。
- ・映画と自分の解釈の違いを見てみたい。
- ・小説と映画の表現の違いを確認したい／比較してみたい。
- ・会話スピードに慣れ、聞き取りしやすくなる／リスニング力も向上させたい。
- ・作品だけを扱うのでは普通の授業と変わらない。

また映画の併用に否定的な学生の意見としては、文学作品と映画作品との差異を認識した上で文学作品単独での解釈を重視したいというものが多かった。

- ・映画はストーリーが変更されていて、混乱する場合もある。

- ・映画が作品をちゃんと反映させているとは限らないので。
- ・本と映画は別物であるので不要。
- ・先入観を持ちたくない。

短編と長編との選択では、短編を好む学生が 80.9%である。その理由の大半は建設的なものであるが、長編との比較において短編の方が容易で扱いやすいからという回答も若干は見受けられる。

- ・色々な作家の文章を読むこと／様々な作風に触れることができる。
- ・たくさん話を読んだ方が面白い／飽きない。
- ・限られた授業時間でしっかりと扱ってもらえそう。
- ・短編の方が予習時に達成感がある。
- ・まずは短編で文学に慣れるようにしたい。
- ・短編ごとに新鮮な気持ちで取り組み、意欲がわく。
- ・話の内容をつかみやすそう。
- ・興味がない長編の場合だとつらいから、短編の方がいい。
- ・長編は一度内容が理解できなくなるとその後、引きずってしまう。
- ・週に一度の授業で長編だと前の内容を忘れてしまいそう。
- ・長編だと途中で挫折しそう。

長編を選択した学生が挙げた理由には「先が気になって読み進めたくなくなり、予習もはかどる」と文学の物語性が読解時の学習意欲を高めるというものや、「長編の方が大きな達成感を得られる」と達成感に言及するもの、「一人ではなかなか読む機会がない」といったものがあった。

### 3-4. 学生アンケート調査結果（全体）

大学Aから大学Eまでのアンケート調査集計結果を一覧にしたものが表12である。

表12 各項目において回答者が占める割合(大学別)

項目	大学 A	大学 B	大学 C	大学 D(理)	大学 D(文)	大学 E
①文学を語学クラスで使って欲しい	71.6%	94.4%	92.8%	63.8%	41.5%	67.9%
②文学を語学クラスで使って欲しくない	27.5%	5.5%	7.1%	23%	28.3%	20.5%
③どちらでも・無回答	0.7%	0%	0%	13%	30.1%	11.5%
④文化・社会的背景も学びたい	81.1%	100%	92.8%	50%	66%	76.9%
⑤映画も用いて学びたい	96.8%	100%	96.4%	90.7%	84.9%	88.4%
⑥短編を使って欲しい	81.1%	88.8%	67.8%	83%	75.4%	80.7%
⑦長編を使って欲しい	15.7%	0%	17.8%	13.8%	13.2%	17.9%
⑧短編・長編の両方を使って欲しい	3%	5.5%	3.5%	2.7%	3.7%	1.2%



全回答者 472 名のうち、英語授業での文学作品の活用に対して肯定的な考えを持つ学生は 319 名であり、全体の 67.5% を占める。留学生を除いた場合では 434 名のうち 281 名が文学作品の活用に対して肯定的な考えを持つことになり、数値がわずかに下がって 64.7% となる。本調査以前に文学作品に触れたことがある日本人学生はわずか 14.2% に過ぎないことを考慮すると、英語学習教材としての文学に対する学生の期待度は非常に高いと言えるのではないだろうか。この結果は、多くの英語教員が想定する以上に、学生は教材としての文学作品に対して好意的であることを示唆している。過半数を超える学生は、文学作品を使って欲しくないのではなく、むしろ積極的に使ってもらいたいと考えているのである。この結果は、英語教育における文学作品の活用について一般的に流布しているイメージとは正反対であると言えるのではないだろうか。

### 3-4-1. 専攻分野別に見る文学作品に対する関心度

各大学における集計結果を比較すると、大学 A、大学 D、大学 E では学生の文学作品への関心度は 40% から 70% 前後に留まる。これらの大学の英語授業では、言語以外を専攻している学生が大半である。これらの大学と比べると、大学 B と大学 C では、文学作品の活用に対して肯定的な学生の比率は高く 90% を超えており、英語教材としての文学作品に対する学生の関心度の高さが窺える。

大学 B と大学 C に共通することは、調査対象となる学生の言語習得に対する意欲が非常に高いことである。大学 B の学生は、英語以外の言語を専攻しており、高いレベルでの英語運用能力を維持した上で、さらに他言語の運用能力も高めたいと考えている。また、大学 C の学生は法学や経済学を専攻しながら、教職課程を履修して英語の教員免許取得を目指している。優れた英語教員に必要とされる高い英語運用能力を身につけなければならないと意識しているわけである。大学 B と大学 C の学生は共に語学力を向上させたいという意欲は強い。想定範囲内ではあるが、言語を専攻している学生、あるいは語学力が求められる職業に就きたいと真剣に考えている学生ほど英語学習に対する目的意識が高く、文学作品に対する関心度が高いと言える。

### 3-4-2. 理系学生と文系学生の文学作品に対する関心度

本調査の結果から判断すると、理系学部の学生は文系学部の学生よりも文学教材に対する興味は低いのではないかと予測も必ずしも成り立たないことがわかる。前述の通り、大学 D の理系学部では、文学作品を語学授業で活用して欲しいと考える学生は 63.8% を占める。他方、同大学の文系学部学生で英語教材としての文学作品に関心がある学生は 41.5% を占めるに過ぎず、これは調査を行った大学の中で最も低い数値である。

大学 D の文系日本人学生群では、文学教材の活用に対して否定的な学生の割合は、大学 B と大学 C を除く他大学とさほど変わらない。その一方、文学教材の活用を積極的に肯定する比率は低い。しかし、大学 D においては、どちらでも構わないと回答した学生は 30.1% を占めており、その他の大学と比べて比率は高いのである。この数値に文学作品活用に対して肯定的な 41.5% を加えると 71.6% となり、大学 B と大学 C を除く他大学と同水準となる。このことを鑑みると、英語教材としての文学作品に対する関心度は、理系と文系という枠組みよりも、むしろ入学難易度という枠組みに影響されると言えるのではないかと。文学作品を積極的に好む層が多いかどうかに関しては、50 前後という入学難易度が一つの分岐点となるのかもしれない。

しかし、英語学習教材の種類について無関心な層も含めると、大学 D においても 70%前後の学生は文学英語教材に抵抗感を持っていないことがわかる。入学難易度の高低に関わらず、英語授業において文学作品を排除する理由にはならないのである。文学教材を選択するかどうかの一つの目安として意識しておくべきではあるが、理系・文系、また学習進捗状況に関わらず、英語教材としての文学作品はやはり受け入れられやすい素材なのである。

### 3-4-3. 短編小説と長編小説に対する関心度

英語教材としての短編小説と長編小説との選択では、専攻分野や進捗状況を問わず、いずれの大学においても 60%台後半から 80%台が短編小説を好む傾向にある。短編を選択した理由も大部分は大学間で共通している。限られた授業時間内で様々な作家の文体や表現に接したり、様々なジャンルの作品に触れたりする方が興味深く、有用であると考えられる学生が多いのである。また、いずれの大学にも文学作品を読みたいと感じながらも、読書には慣れていないという理由で長編を扱うことには抵抗感があり、消極的な理由で短編を選択した学生も見られる。

他方、どの大学においても長編と短編を両方扱って欲しい、あるいは長編を扱って欲しいと考える学生が一定数存在する。これらの学生のほとんどは学習進捗状況が進んでいる層であり、学習意欲の高い層でもある。全体に占める比率としては 5%~20%前後に過ぎないが、受講生の学習進捗状況次第では、英語学習教材として長編小説を活用することが学生の意欲をさらに高めるためにも有効である。

進捗状況が緩やかな学生を対象にするクラス、あるいは様々な進捗状況の学生が混在するクラスではまずは短編小説を教材として導入することで、学生は困難さを感じて学習意欲を損なうことなく、授業に取り組むことができるのではないかと。

### 3-4-4. 文化・社会的背景に対する関心度

アンケート調査結果からは、文学作品を学ぶ際に文化・社会的背景もあわせて学びたいと考える学生が多いことがわかる。大学 D では低めの数値ではあるが、それ以外の大学の回答では 70%の後半から 100%となっており、学生の文化・社会背景に対する関心も高い。

回答において一定数の学生は文学作品を理解するためには、文化的・社会的背景についての知識や理解が不可欠であることに言及している。特に文学作品に対する関心の高い大学 B と大学 C の学生群では、文化・社会的な背景についての関心度も 90%以上と非常に高い。これらの学生は異文化に属する人たちとのコミュニケーションの際には、その相手の文化的・社会的な事象についても知る必要があることを認識しており、それゆえに文学作品が実践的英語力の向上に有効であると考えているのではないかと推察できる。

文学作品は文化的構築物であり、誰でもが手軽に触れることのできるオーセンティックな素材でもある。真の意味での実践的コミュニケーション能力を高めたいのであれば、対話する相手の文化的・社会的・歴史的背景や考え方を知り、敬意を払うことが必要となる。文学教材を活用することで、学生は他文化に関する事象を単なる知識として学ぶだけでなく、より自然な形で、生きた文脈の中で学ぶことができる。活用法次第で文学作品はコミュニケーションに必要なことを学ぶのに最適な教材になり得るのである。

### 3-4-5. 映画に対する関心度

英語授業内で文学作品と併用する形で映画メディアを活用することについては、84.9%から96.8%の学生が肯定的な回答をしている。すべての大学の学生が高い関心を示しているわけである。授業運営の際には、学生の学習意欲をどのように高めるかも重要な鍵であるがゆえに慎重に教材を選択しなければならない。学習進捗状況の緩やかな学生から、進捗状況が進んだ学生まで、そのどちらにとっても映画・映像メディアは学習意欲を高める教材となり得ることがわかる。

映画の黎明期から現在まで文学と映画は緊密な関係にあり、相当数の映画は文学作品を下敷きにしていたり、文学作品からインスピレーションを得て創られたりしている。また、文学作品も映画作品も多様な解釈を可能としており、学生に彼ら自身の独自の意見を持たせるのに適した素材である。そのため、議論の素材として活用するにも最適であると言える。学生も言及しているように、特定の場面に関して原作と映像化された場面を比較しながら、議論をさせるなど、授業展開に変化をつけやすくなる。

また、文学と同様に、映画も非英語圏の英語学習者に手軽にオーセンティックな英語に触れる機会を提供する。文学作品は書かれた文字を、映画は字幕を除けば音声や映像を基盤としている。文学作品と映画・映像作品を併用することで、両者が不足している部分を補うことになる。特にいわゆる四技能の向上を目的とする授業においては、多くの学生が関心を持つこれら二つの素材を活用することで、学生の学習意欲をさらに高め、学習効果も上げやすくなる。

### 3-4-6. 文学作品に対する否定的イメージという誤解

本アンケート調査は、「実践的な」コミュニケーション能力の向上を謳う『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』以降に実施された。2003年以前から既に英語学習教材としての文学作品に対する風当たりは強く、文学教材は実践的ではないというイメージが浸透していた。多くの大学における TOEFL や TOEIC をはじめとする英語運用能力試験重視の傾向もあり、いつの間にか学生は文学作品が嫌いなのではないかというイメージが広まることになったのではないか。

しかし、文学教材は他国における文化的・社会的背景など真のコミュニケーション能力の育成に不可欠な事柄を学び、しっかりとした中身のある対話ができるように学生を導く素材として有用である。この意味で文学教材は「実践的」なのである。英語教材としての文学作品に、学生が抵抗感を持っているというイメージも誤解に過ぎない。むしろ、学生は様々な教養や文化的背景なども含めしっかりとした内容を有する教材を通じて、英語を学びたいと考えている。そうだとすれば、英語学習素材としての可能性を有する文学教材を排除することは大きな誤りなのである。

## 4. 文学作品を活用した英語教育の新たな流れ

文学作品は学生の学習意欲を高める教材として有効であるにもかかわらず、文学教材が普及しているとは言えない現状がある。問題の一つは文学素材をベースとした英語教材が不足していることである。種類が少ない上に、本文の表現に注積がついているだけという構成の

文学教材も多い<sup>8)</sup>。もちろん、この類の教材も使い方次第では有用ではあり、様々な授業展開が可能となる。英語授業において文学作品を用いる場合、あくまでも文学作品は教材であり、それを活用して英語を教えるわけである。注釈だけのテキストをコミュニカティブに活用しようとする場合、授業運営においては教員側の工夫が欠かせない。それゆえに、英米文学を専門とする英語教員以外には扱いつらいと考えられ、使用を避けられる傾向にあるのではないか。学生が英米文学作品に関心を抱いているという事実を認識したとしても、多くの教員にとって扱いやすい文学教材はあまりにも少ないのである。

#### 4.1. 副教材としての文学素材の活用

このような状況下で文学作品を活用する一つの方法としては、授業運営において文学作品に副教材的役割を担わせるやり方がある。表 13 は大学 A と大学 B の英語授業において文学作品を活用した際の三コマ分の授業展開例である。主教材として、映画を契機として様々な社会問題について考えさせる教材『感動のスクリーン・イングリッシュ』を活用して授業を運営した際の大きな流れを示している。

表 13 Chapter 1 : The Cider House Rules を扱った授業展開

基本的な授業の流れ	
①導入	章の中心となる映画の本編やメイキング映像などを活用しながら重要な場面を説明・解説。
②リーディング部分の取り組み	(1)速読を通して、テキスト本文の大まかな内容把握。 詳細な意味については授業外課題として割り当てた学生訳をまとめたハンドアウトを配布・チェック。 (2)エクササイズの取り組み。
③関連映画	章のテーマと関連した他の映画を紹介・解説。 ・If These Walls Could Talk(『スリー・ウイメン』)
④追加リーディング	章のテーマをより直接的に扱った文章の読解作業(前週にハンドアウト配布済)。担当者による内容・意見の発表。
⑤チェッククイズ	(1)扱った範囲に出てくる語彙・表現のチェックテスト。 (2)章で扱う映画や、関連した映画や歌を用いた聞き取りテスト。
⑥文学作品の読解	章のテーマと関連する短編小説をハンドアウトとして配布。 ・“Cat in the Rain”
⑦意見の発表・発信	授業の一部を用いての考えのプレゼンテーション。場合によってはライティング課題で代用。

第 1 章『サイダーハウス・ルール』<sup>9)</sup>を中心に据えて展開したこの授業では、学生の興味を喚起するために、導入として映画本編やメイキング映像も活用した。必ずしも学生自身がこの映画を鑑賞しているとは限らない。映像を用いて解説することで、視覚・聴覚の両面から学生に映画の全体像を把握させるとこと、また同時に扱われているテーマについての学生自身の立ち位置を考えてもらうことが目的であった。

次に第 1 章の本文の読解作業を行った。まずは大まかな内容把握を心掛けながら読み進め

させる。単調な訳読は避け、詳細については課題担当学生から事前に提出してもらった訳をハンドアウトとして配布し、誤っている部分を中心に訂正・解説を行うだけに留めた。学生が解釈を間違っている箇所は、多くの学生が意味や文法構造を取り間違えている箇所であることが多い。この進行形式を取り入れることで、限られた時間内で授業をスムーズに展開させることができると同時に、学生の集中力も途切れさせることなく読解作業を展開できる。

さらにテーマ的に関連する映画・映像を紹介することで、さらなる考察の視点を加えた。本章では女性問題に焦点を合わせた。過去から現在に至るアメリカの中絶問題を扱う映画『スリー・ウイメン』<sup>10)</sup>の一部を活用し、中絶問題という賛否両論のテーマについて、賛成論者と反対論者双方の考えを知った上で、このテーマについてさらに考えさせた。

次に学生の学習状況と関心を鑑みながら、追加の読解素材として、中絶に関する法律・訴訟問題など章のテーマと関連した時事的な素材をハンドアウトとして配布した。テーマ的に関連した文章に多く触れることで学生の考えを洗練させることが目的である。ハンドアウトは授業で使用する前週に配布し、担当学生を決めた上で指定授業回に発表という形式を取った。配布資料を選択する際には、語彙の定着を図るために主教材や映画内で使用されている表現が出てくるもの、また議論や発表の際に知っておくと役に立つ関連表現が使われているものを選ぶように心掛けた。

この時点でこれまでの学習内容をまとめる形で語彙・表現テストとリスニングテストを行い、学習した内容の定着を図った。これらの作業の過程で、学生は主要テーマについての考えをまとめ、自分の考えを表現するために最低限必要な語彙・表現を学ぶことになる。

ここで、女性問題というテーマと関連する文学作品を学生に提示した。本授業ではアーネスト・ヘミングウェイの短編「雨の中の猫」(“Cat in the Rain”)を扱った。アメリカ社会における過去・現在の女性の状況を一通り知った上で、女性の登場人物を意識させながら短編に取り組みさせたわけである。一様な解釈を許さず、授業内で学生が議論しやすい短編としてこの作品を選択した。短編活用の目的は、授業内で学んだ視点を活用して短編小説を読み解く作業を通じて、テーマについてさらに掘り下げて検討させ、学生が自分の意見を発信したいという気持ちを高めることである。

最後にプレゼンテーション課題、あるいは学生数によってはライティング課題を出し、学んできたことやリサーチを通じて、学生自身の考えを英語でまとめてもらった。

この授業構成の目的は、主教材だけでは内容的に不足している部分を補い、様々な視点から物事を考え、発信する機会を提供することである。このような流れで授業を行うことで、学生は学んだことをより現実に即したものと捉え、テーマについてさらに深く考えるようになった。その結果として、プレゼンテーション課題やライティング課題の質も向上したと言える。このように必要に応じて補足的に文学作品を用いることも、文学作品を活用する有効な手段ではないだろうか。

## 4.2. 文学を活用した新たな英語教材とハンドブックの登場

投げ込みで文学作品を活用するだけでは、文学教材不足の根本的解決にはつながらない。しかし、近年、このような閉塞的状況を打破しようとする動きも活発である。たとえば、ドナルド・ソボルの作品をベースとする『ミステリーを読んで英語のスキルアップ』は、学生の学習意欲を高めるための素材としてリライトされていない短い謎解き物語を取り上げている。各物語の内容と関連する語句・表現に加え、文化・社会的事象にも言及しながら、コミュニケーションに必要な推測力・読解力、そして議論力を高めることを目的とする書籍である。物語は易しい英文で書かれてはいるが、オーセンティックなものである。学生は謎を解

くことで達成感を得て、さらに学習意欲と英語力が高まる仕組みになっている。

また、ロアルド・ダールの作品を活用した『100倍楽しめるダールの物語』<sup>1)</sup>は語彙力、文法力、そして発信力を養成する書籍でもある。これらをはじめとして、これまでにはあまり存在しなかった形式の書籍、つまり文学の面白さを最大限に活用しようとする英語学習書籍が登場しはじめているのである。

さらに2013年には文学作品を用いた英語授業の展開そのものを教授する書籍も出版されている。『文学教材実践ハンドブックー英語教育を活性化する』は、オーセンティックな文学作品を素材として、どのような授業展開が可能かを、具体的な展開方法を説明するチャートと共に詳述した書籍である。チャートと解説を手がかりとして、教員が文学作品を活用しながら多様な英語授業を実践できる構成となっている。

このように文学作品を用いた新たな形式の大学英語教材や英語教員を対象とする実践ハンドブックなどが次々と出版されるなど、文学を巡る状況には多少の変化がみられる。当然のことながら、英語教育の教材すべてが文学教材である必要はない。しかし、文学作品には学生に受け入れられる素地があることは明白である。過去の否定的イメージで文学教材を実践的ではないと切り捨てるのではなく、「実践的な英語教育」に適する文学作品を学習教材として積極的に取り入れ、活用していくべきなのである。

## 5. 文学作品と映像作品を用いた英語教育の可能性

英語教材としての文学作品には、学生のニーズがある。文学作品は学生が英語授業で活用して欲しい素材なのである。文化的・社会的・歴史的な文脈から言葉だけを切り離して学習するだけでは、大学における英語教育としては不十分である。コミュニケーションには対話する相手の文化・社会的背景を知り、対話する相手の考えを尊重することが欠かせない。また語るべき価値のない内容を発信したところで、それは真のコミュニケーションとは言えない。大学英語教員は、学生が英語で語るべき価値ある内容を英語で発信できるように導く必要もある。文学作品はそのような目的にも適った教材なのである。

また映画作品も物語性を有し、文化的・社会的な事柄を学ぶためにも最適な教材である。文学作品と映画作品は共に、英米社会や文化に関する学生の多面的な理解を促進させ、学生の知的好奇心を刺激し、学生の学習意欲を高め、自分の考えを発信したいと思わせる素材である。受動的な授業ではなく、学生に能動的に英語で意見を発信させる形式の授業、つまり発信型の英語教育プログラムにおいてこそ、英語学習教材としての文学作品と映画作品は本領を発揮するのかもしれない。効果的な学習教材としての文学と映画の可能性については今後とも探究し続ける必要がある。

### 註

1) 文部科学省. 『英語が使える日本人』の育成のための行動計画 2003 p.2

2) 『100倍楽しめるダールの物語』の「はしがき」において、森永は文学作品を使用した授業を通じて英語力が向上すると強調する。1回目と15回目の授業で実施した語彙力判定テスト(Vocabulary Levels Test)では409語の伸び、文法力測定テスト(Standard Grammar Test)では60点中1点の伸び、そして総合力判定テスト(C-test)では100点満点中6点の伸びが見られたと報告している。

3) 塩沢正・吉川寛・石川有香(編) 『英語教育と文化ー異文化間コミュニケーション能力の養成』大修館書店 2010 p. 184

- 4) 文学教育研究会は、大学英語教育学会(JACET)関西支部で最も古い歴史を持つ研究会の一つであり、文学作品を活用した英語教育を中心に研究や教材開発を行っている。近年の活動詳細については研究会 HP (<http://bungakukyoku.blog135.fc2.com/>)を参照。
- 5) 第45回大学英語教育学会(JACET)全国大会(2006年9月2日開催、関西外国語大学)におけるシンポジウム「私の文学教材実践報告：文学の可能性を探って(授業力・大学全入時代の大学英語教師)」である。本稿はこのシンポジウムにて口頭発表した際のデータを元に加筆修整を施したものである。
- 6) 安田優「文学教育研究会の歴史」『JACET 関西紀要』第14号 2012 p.106
- 7) 入試難易度については代々木ゼミナール提供の資料を参考にしている。国立大学については二次ランクを示した。これらの数値は大学間の比較のための便宜上の目安として提示したに過ぎない。
- 8) 大手大学英語教科書出版社の2014年度教科書目録に記載されている書籍のうち、全体の約10%から20%が文学関連の教材である。しかし、その大半は文学作品に注釈がついている形式の既刊である。エクササイズを含む多角的な構成がなされている文学教材の数は、新刊も含めてまだまだ少ないのが現状である。
- 9) 『サイダーハウス・ルール』(原題：Cider House Rules) DVD 発売日：2005年11月25日、販売元：アスミック
- 10) 『スリー・ウイメン』(原題：If These Walls Could Talk) DVD 発売日：2005年2月16日、販売元：ポニーキャニオン 1950年代、1970年代、1990年代のアメリカにおける中絶問題をテーマとする3つの物語から構成されるオムニバスTV映画である。
- 11) 本書のはしがきとコラムにおいて、編著者である森永は、3大学で実施した学生アンケート調査で約8割の学生が大学英語授業で文学作品を教える意義を認識していると言及している。

#### 参考文献

- 一色真由美、スティーブン・コットリル、サラ・エリス、ダニエル・ギア、リチャード・シュワルツ、ジム・クヌースン.(2002).『感動のスクリーン・イングリッシュ』.東京：南雲堂
- 映画英語アカデミー委員会(編).(2012).『第一回映画英語アカデミー賞』.名古屋：スクリーンプレイ事業部
- 大津由紀雄、江利川春雄、斎藤兆史、鳥飼玖美子.(2013).『英語教育、迫りくる破綻』.東京：ひつじ出版
- 奥野久.(2007).『日本の言語政策と英語教育』.東京：三友社出版
- 角山照彦.(2008).『映画を教材とした英語教育に関する研究』.岡山：ふくろう出版
- 小池生夫.(2013).『提言 日本の英語教育—ガラパゴスからの脱出』.東京：三村図書出版
- 斎藤兆史、中村哲子(編).(2009).『文学で学ぶ英語リーディング』.東京：研究社
- 斎藤兆史(2013)『教養の力 東大駒場で学ぶこと』東京：集英社
- 塩澤正・吉川寛・石川有香(編).(2010).『英語教育と文化』.東京：大修館書店
- ジャック・C・リチャーズ(編). 多田稔(監修・監訳)、石野はるみ、菅田浩一、古荘智子、西田晴美、小林清子、依岡道子、安田優(訳).(2010).『読みの学習者から読みの教師へ—第2言語(英語)教育の問題点とその術策—』.東京：英宝社
- スクリーンプレイ編集部(編).(1995).『映画英語教育のすすめ』.名古屋：スクリーンプレイ出版
- 鈴木佑治.(2012).『グローバル社会を生きるための英語授業』.東京：三省堂書店
- 中谷安男、八尋春海(編).(2003).『映画英語教育論』.名古屋：スクリーンプレイ出版
- 森永弘司.(2013).「EGP (English for General Purposes)カリキュラムと ESP (English for Specific Purposes)カリキュラムの特徴及び長所と短所—2つの大学のニーズ・アナリシス質問紙調査の結果にもとづく考察を通して—」*Asphodel* 第48号. 京都：同志社女子大学英文学会

- 森永弘司(編). (2014). 『100倍楽しめるダールの物語』. 東京: 松柏社
- 吉村俊子・安田優・川畑彰・奥村真紀・杉村醇子・S. ジョーンズ(編). (2011). 『ミステリーを読んで英語のスキルアップ』. 東京: 英宝社
- 吉村俊子・安田優・石本哲子・齋藤安以子・坂本輝世・寺西雅之・幸重美律子(編). (2013). 『文学教材実践ハンドブックー英語教育を活性化する』. 東京: 英宝社